

神奈川県における縄文時代文化の変遷VIII

—後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その3—

—堀之内1式土器の変遷—

縄文時代研究プロジェクトチーム

はじめに

平成21年度から神奈川県における後期前葉の堀之内式土器文化期の様相について研究を開始した。21年度は報告書を中心とした文献収集、基礎的なデータベースを作成し、その成果を『研究紀要15』に掲載している。昨年22年度は堀之内1式の編年案構築に向け、資料のデーターシートを作成し、住居址検出遺跡の集成と住居址・土坑あるいは層位的な一括出土事例の比較検討を行った。『研究紀要16』に県内の当該時期における良好な一括出土事例12例を掲載した。3年目となる今年度は、抽出した一括出土事例を中心とした資料の検討を行い、先学の研究成果を参考しながら、現時点における堀之内1式期の編年案構築を目指す。

堀之内1式には器形と文様の構成を異とする複数の土器群が認められ、地域性を示しながら、それぞれが系統的に変遷することが知られている。こうした堀之内1式の土器群については、すでに『研究紀要15』で研究略史として述べたように、堀之内1式については鈴木徳雄による「6類型」の系統（縄文セミナーの会2002『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討—記録集—』）、石井寛による「6類型」と「5細別案」（石井1993「堀之内1式土器に関する問題」『牛ヶ谷遺跡 華蔵台南遺跡』）がある。本稿においては一括出土事例に依拠し、石井の提示した6類型についてその時間的変遷を追い、また各段階に伴う注口土器や浅鉢について述べる。

ここでは石井が提示した堀之内1式の6類型（石井1993）を概ね以下のように理解しておく。

A群：称名寺式土器の系譜を引くもの。キャリパー状の器形で、沈線により称名寺式土器に見られたJ字や剣先状のモチーフあるいは、それが単純化したとみられるU字や逆U字の懸垂文を描く。

B群：キャリパー状を呈し、複数の沈線による直線的な懸垂文と斜行文によって文様を構成するもの。

C群：外反する口縁から頸部を無文とし、胴部へ文様を施すもの。IからIII群に細別される。器高に対し口径が大きくなる所謂「金魚鉢」の器形を多くみとめるが、一方で石井も述べているように後述するD群との判別に苦慮する事例がある。

C I群：胴部に渦巻文を配置し、それを斜行文などで繋ぐもの。

C II群：胴部の文様構成が懸垂状となるもの。

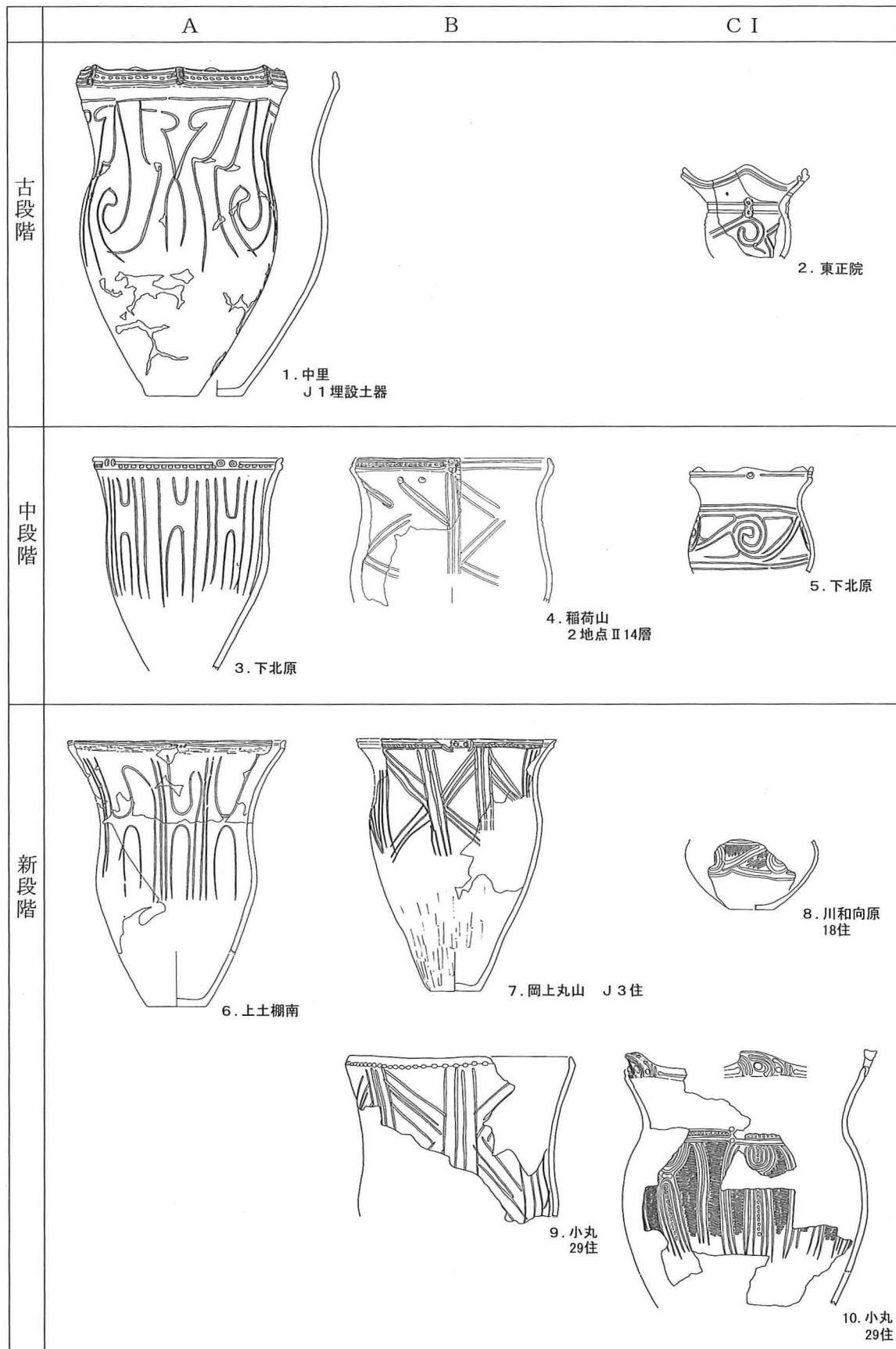
C III群：胴部の横位の文様帯を配するもの。

D群：口縁部を無文とし、胴部に文様を施す綱取式の系譜を引くもの。綱取式の器形を踏襲し、C群に比較して、口縁部の無文帯は狭く頸部の窄まりも著しくない傾向にある。

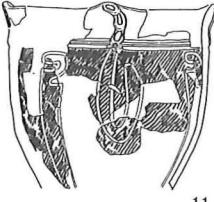
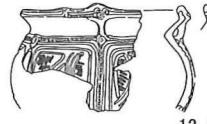
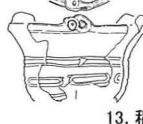
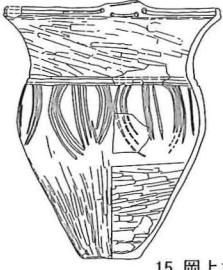
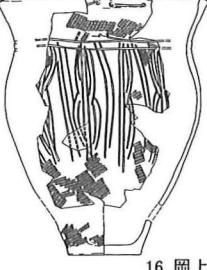
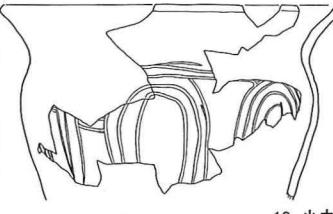
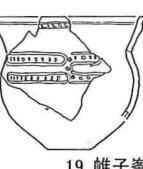
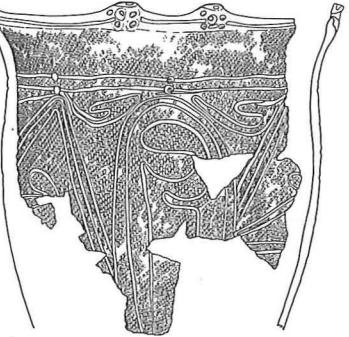
E群：D群の口縁部無文帯を省略し、A群の口縁部を採用したもの。石井はD群・A群との折衷があることを指摘し、またF群の特徴となる朝顔形の器形が一部含まれるとする。この点、特に本群と後述するF群の区別に混乱が生じるが、石井はF群を朝顔形とともに垂下隆帯などにより器面が区画されるものに限定し、J字や蕨手文などの単位文が施されるものについてはその器形にかかわらず、本群に含めるものとしている。

F群：朝顔形の器形を呈し、縦位の懸垂文・隆帯を口縁部から垂下させるもの。石井はさらに文様帯の下端区画も本群の要素として掲げているが、後述するようにこの点は保留しておく。

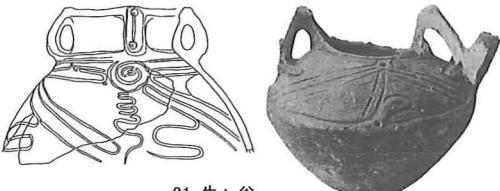
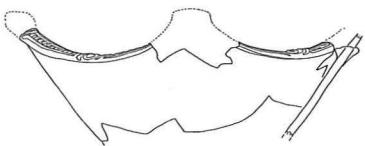
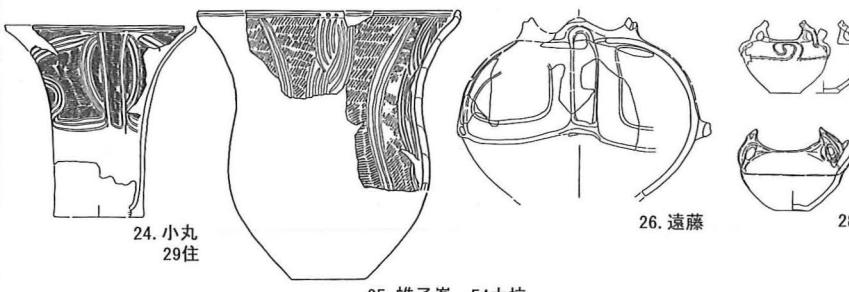
（小川岳人）



第1図 神奈川県内における堀之内1式土器編年案 その1 (S=1/10)

	C II	C III	D	E
古段階				11. 玄海田
中段階				14. 多摩区No.61
新段階				15. 岡上丸山 J 3住 16. 岡上丸山 J 3住 17. 川和向原 18住
				18. 小丸 29住 19. 姫子峯 54土坑 20. 小丸 29住

第2図 神奈川県内における堀之内1式土器編年案 その2 (S=1/10)

	F	注口土器・浅鉢形土器
古段階		
中段階	 21. 牛ヶ谷 22. 中川中学校	
新段階	 23. 川和向原 18住	
	 24. 小丸 29住 25. 帷子峯 54土坑 26. 遠藤 27. 帷子峯 54土坑 28. 岡上丸山 J 5住	

第3図 神奈川県内における堀之内1式土器編年案 その3 (S=1/10)

古段階（第1図1・2・第2図11）

古段階は称名寺式期土器群の諸要素を色濃く残している段階として考えられる。本段階の県内出土資料を概観してみるとA群の資料がもっとも豊富であり、CⅠ群、D群が散見される様相を示す。E群に類型される資料は良好な出土事例に欠けているようであり、その他の類型であるB群、CⅡ・Ⅲ群、F群の土器に関しては出土事例に欠けるような様相を示しており、今回の変遷図には反映することができなかった。A群に類型される中里遺跡J1埋設土器（第1図1）は口縁部に沈線を有し、胴部にJ字文が施文される深鉢形土器である。文様構成に称名寺式土器の要素がよく引き継がれており、口縁部には沈線が明瞭に巡っていることからも、前型式の称名寺式新段階土器群との関係性が読み取れる。文様が簡素化されていく本段階以降の土器群と比べてみても、称名寺式期の要素を引き継いで表現していることが読み取れよう。CⅠ群に類型される東正院遺跡包含層出土の資料（第1図2）は、外反する口縁部から頸部にかけて無文であり、胴部中位がくびれ反するように下位が膨らんでいく器形をなし、キャリパー形の様相を呈する鉢形土器である。このような土器は称名寺式土器群の加曾利E系の土器群に影響されている可能性もある。文様構成はくびれを境に異なる文様が施文され、胴部には特徴的な沈線による渦巻文が描出される。D群に類型される玄海田遺跡包含層出土の資料（第2図11）は、CⅠ群と同様に口縁部付近に無文帯を持ち胴部に文様が施文される深鉢形土器である。胴部は縄文を地文とし、2条の沈線により文様が施文される。この土器には逆方向のJ字文とも見られる意匠が描出されており、前型式の称名寺式との関連が読み取れる。

(近藤匡樹)

中段階（第1図3～5・第2図12～14）

中段階は、称名寺式土器の諸要素を色濃く残す古段階から称名寺式的な色彩が希薄化し、懸垂文主体の文様構成や複数条の沈線による文様描出が盛行する段階で、F群（所謂朝顔形深鉢）を伴わない段階とした。

称名寺式土器の系譜下にある土器群と考えられるA群においては、J字状モチーフを主体とする称名寺式的な文様構成から単沈線による懸垂文を主体とする文様構成への推移が認められる。県内出土資料としては、伊勢原市下北原遺跡出土の深鉢（第1図3）が好例として屡々取り上げられている。第1図3は、狭小な口縁部文様帯下に懸垂文とH字状文が交互に展開する資料である。文様は器面全体をうめるように密に配されているが、前後段階に配した資料（第1図1・6）との対比から、本群における大きな流れとして、懸垂文の間隔が間延びし、その間隙をうめるモチーフが単純化するという傾向が捉えられよう。

B群とした土器群は、複数条の単沈線を垂下させた懸垂文を斜行沈線で連絡する特徴的な文様構成を探るものである。前段階に該当する確実な事例を抽出することができなかったことから、本段階から組成する一群と考えられる。第1図4は、横浜市稻荷山貝塚第2地点の貝層中から出土した資料である。3単位の懸垂文を鋸歯状に配された2単位の斜行文で連絡するもので、口縁部には枠状区画内に列点状刺突を充填した狭小な文様帯が配されている。

C群とした土器群は、頸部が括れ、外反する無文の口縁部を有する鉢形土器で、主に関東南部に分布域を持ち、主文様の違いによって3細分（CⅠ・CⅡ・CⅢ群）される。CⅠ群は、称名寺式土器関沢類型の系譜下にあるとされるもので、単位文的に配された渦巻文を斜行文で連絡する胴部文様が展開する。第1図5は、下北原遺跡出土の鉢形土器で、2単位の沈線で描出された渦巻文を2～3単位の斜行文で連絡している。2単位の沈線による明瞭な胴部文様帯下端区画を有しており、前段階に配された資料（第1図2）との大きな相違点となっている。CⅡ群は、懸垂文主体の文様構成を探るもので、胴部文様帯の下端は開放している。

B群同様、前段階に該当する確実な事例を抽出することができなかつたことから、本段階から組成する一群と考えられる。第2図12は、伊勢原市池端・椿山遺跡J9号竪穴住居址出土の鉢形土器である。隆帯と2単位の沈線からなる懸垂文が施されるもので、懸垂文間には3単位の弧状沈線が配されている。CⅢ群は、胴部上半を中心に横帯文が施されるもので、やはり、本段階から組成する一群と考えられる。第2図13は稻荷山貝塚第2地点の貝層中から出土した鉢形土器である。本資料においては横帯区画内に縄文の充填はみられないが、上述した池端・椿山遺跡J9号竪穴住居址からは区画内に縄文を充填する横帯文資料2個体が出土しており、第2図12との良好な供伴事例となつてゐる。

D群とした土器群は、所謂綱取式土器の系譜下にあるとされる一群で、本県での出土事例は多くない。前段階での出土事例はあるものの、本段階に帰属する確実な資料を抽出することはできなかつた。

E群とした土器群は、D群から無文口縁部を省略しA群の口縁部を採用したとされる深鉢形土器で、A～C群に比べると、本県における出土事例は多くない。第2図14は、川崎市多摩区No.61遺跡東地区出土の深鉢形土器である。縄文を地文とするプロポーション変化に乏しい資料で、文様は単沈線による蛇行懸垂文のみが配されている。

(井辺一徳・岡 稔)

新段階（第1図6～10・第2図15～20・第3図24・25）

新段階の特徴として、朝顔形の器形が現れることと、沈線の多重化が進むことが見て取れる。この段階の事例は充実しており、その中でも時期差が見て取れたため2時期に分け、ここでは古い段階について述べる。

A群（上土棚南遺跡第3次調査 後期一括・第1図6）ではJ字文と懸垂文が交互に配置される構成が前の段階より進んでいる。口縁部の施文も簡略化される傾向がみてとれる。B群（岡上丸山遺跡J3竪住・第1図7）では、前段階では2本ないし3本を基本としていた沈線の単位が、この段階に来るとほぼ3本が基本になってくる。A群ほどではないが、口縁部の施文もやや簡略化されてくる。CⅠ群（川和向原18号住居・第1図8）では前段階まで明瞭であった渦巻文の形が崩れ、横の区画がやや不明瞭になってくる。事例では下端区画は渦巻文の下と渦巻文の下を横位につないでいる程度で、はっきりとした区画という意味合いは薄らいでいるように思える。CⅡ群（岡上丸山遺跡J3竪住・第2図15）では垂下降帯よりも対弧文が目立つ構成になってくる。それもあってD群との分類がしにくくなる。石井氏によると、このころからCⅡ群の個体数が増加し、堀之内2式へ継続し、最も安定した類だという（石井1993）。CⅢ群は共伴関係から事例を挙げたかったが、良好な事例が見いだせなかつた。単体の出土事例ではこの段階も存在すると思われるが、この時期に帰属すると具体的に断定できる例を挙げることができなかつた。D群（岡上丸山遺跡J3竪住・第2図16）は胴部下部と口縁部に縄文が施文されているが、基本は沈線による対弧文である。本資料では対弧文はやや崩れている（石井氏が提唱する4段階のD群の特徴は器面の齊一化が進行し半截竹管による沈線多重化が進み、単位文ではなくなるとしている。本資料はそれらの特徴も備えている）。E群（川和向原18号住・第2図17）は懸垂文と対弧文で施文されている。石井氏によると施文の変遷過程がD群とE群では共通しているとされており、資料あげたD・E群の文様の基本的な施文は同じであるので石井氏の指摘（石井1993）が妥当であるといえるだろう。F群の該当時期の資料は見いだせなかつた。E群としたグループの下端区画が次段階で発達して、F群へ派生していくと考えることもできるかもしれない。（宗像義輝）

新段階に属すると思われる一括資料の中で、器面の沈線描出部分でない余白の広い面積に対して充填縄文

をもつ資料（第3図24・25）を含む資料は、関東地方の中でも南西関東に多く存在すると考えられているものであるが（石井1995）、より新しい傾向をもつものと考えられる。後続型式の堀之内2式土器が2本の沈線に挟まれた帶状部分に充填縄文を施すことを特徴としてもち、充填縄文をもつ土器に、それへの技法上の近似性が感じられるからである。しかしここに掲載した資料は口唇部に堀之内1式土器に特徴的な1条の沈線をもつもので、充填縄文の施文部分も沈線に挟まれた帶状の部分ではなく、沈線の余白部分であり、一般的な堀之内2式土器との違いを示している。その一方、等間隔で平行に引かれた沈線（3本沈線が主）間は平滑に磨かれ、余白の縄文施文部とは際立ったコントラストをなすことが多いこと、土器の器厚が薄く朝顔形の器形が増えてくることなど、堀之内2式土器の充填縄文土器と近似した傾向を持っている。横浜市帷子峯遺跡54号土坑出土土器は堀之内2式土器を含まない点で該期の良好な一括資料であるが、第3図25が出土している。これは口縁が外反するが胴下半部が張り出すため、朝顔形土器とは言えず、器種分類に困る土器であるが、等間隔で多条化した沈線の余白部への充填縄文が存在するので本段階の典型的な土器と言える。沈線余白部への充填縄文をもつ土器はF群の朝顔形土器に多い。第3図24は横浜市小丸遺跡29号住居址出土の朝顔形土器。胴部上半に文様をもち、下半は無文とし、文様帶の下端に横位の区画線が、途切れながらも引かれていて、堀之内2式土器への接近が見て取れる。この文様帶下端を巡る沈線が器面を一周するようになり、文様帶下端区画が完成した土器に対しては、堀之内2式土器とする考えも出されており（鈴木徳1982など）、現在、研究者間で、堀之内1式と2式の型式分別の評価の確定していない部分となっている。小丸遺跡29号住居址でもそのような土器は少し出ており、著名な例としては横浜市原出口遺跡20・21号住居址出土土器（かながわ考古学財団研究紀要16号第4図）がある。小丸遺跡29号土坑は帷子峯遺跡54号土坑より幾分新しい土器を含むと言える。最後に組成について見てみる。帷子峯遺跡54号土坑では胴部に横帶文（楕円文）をもつCⅢ群（第2図19）も出土している。これは楕円文内に棒状工具による刺突を並べたもので、器厚も薄いことから、本段階に属すると考えた。また小丸遺跡29号住居址では頸部無文帶をもつ鉢形土器C群（第1図10・第2図18）が出土している。第1図10は胴部上端に渦巻文をもち、その下に縦位沈線が垂化している。渦巻文をもつためCⅠ類にした。3本沈線の沈線文の余白部に充填縄文が施されている。第2図18は懸垂文をもつためCⅡ群にした。沈線文は3本沈線で描かれているが、沈線間は等間隔でやや広くなっている。この垂下文はA群の逆U字状文の影響を受けているかもしれない。この他、A群も存在すると思われるが、図示できる良好な資料はなかった。第1図9はB群で、これも小丸遺跡29号住居址出土。縄文はなく、3ないし4本の沈線のみで縦位沈線とその間を連結する斜線を描いている。沈線は等間隔で、沈線間隔がやや広くなっている。この沈線間隔がやや広くなっているのは第2図18にも見られるが、堀之内2式土器の充填縄文を描出する2本の沈線の間隔が広いことと通じるものと評価すれば、新段階の中でも新しい傾向と見ることができるとと思われる。第2図20は地縄文上に沈線文を施文した無文頸部をもつ深鉢形土器（D群）で、小丸遺跡29号住居址出土である。D群の中では沈線が多条化し、蕨手文の崩れた懸垂文間を沈線が密に埋めている。

（松田光太郎）

注口土器・浅鉢形土器（第3図）

注口土器・浅鉢形土器に関しては、遺構内一括出土資料など他の器形と伴出する出土状況を有し、器形や文様構成を把握できる遺存の良い土器を主眼に抽出作業を行った。その結果、対象となる土器は少なく、他器種との関係が明瞭な資料は極めて少ない状況であった。注口・浅鉢形土器は深鉢形土器に比して器種構成

比率で少ないと起因すると考えられる。資料の大半は破片であり、全体の器形や文様構成を捉えられず、基本となる資料不足の感は否めない状況にある。したがって今回は中段階と新段階もしくはその次段階へ継続する注口土器資料の一部を提示し、浅鉢形土器及び各段階資料などの充実は今後の事例増加に期待したい。

注口土器の器形変化を見ると、中段階では縦長で胴中央部で膨らむ樽形（壺形）に近い器形（第3図21）や球胴形（第3図22）を主体として、構成されているものと思われる。新段階ではより球形として丸く膨らむ器形（第3図26）も認められるが、中段階に比してやや器形の扁平化（第3図27・28）が若干ではあるが傾向としては捉えることができ、文様構成も胴部上半部に限定して施されている。浅鉢形土器に関しては、良好な事例に恵まれないため器形の系統的な変遷は明瞭ではない。

中段階（第3図21・22）

第3図21は牛ヶ谷遺跡包含層出土の上半部を残す資料である。直線的に立ち上がる口縁部と曲線的に膨らむ器形（壺形）であるが下半部は不明である。口縁部には4単位の橋状把手、把手下端部には渦巻文と3条単位の横位・斜方向の直線的な文様が施されている。渦巻文などからは蛇行する単沈線が懸垂する。第3図22は中川中学校出土のほぼ完形の資料である。器形は算盤玉に近い形態を呈し、2単位の把手と直立気味に立ち上がる注口部を有する。上半部には3条単位の直線的な沈線が斜方向に施されている。

新段階（第3図23・26～28）

第3図23は川和向原遺跡第18号住居跡出土資料で、深鉢形土器のC群・E群との伴出関係を把握できる鉢もしくは浅鉢形土器の資料である。4単位の波状口縁で、波頂部には突起を有すると思われ、口縁部には沈線による区画などの文様が施されている。胴下半部から底部を欠損するため全体は把握できない。

第3図26は遠藤遺跡貝塚出土資料で胴部は大きく膨らむ球に近い形態（壺形）を呈する。4単位の把手から直線的に垂下する隆帯や胴中位にめぐる2条単位の横位隆帯が施されている。新段階もしくはそれ以降の段階に帰属する可能性を含むものである。同様のものとして、第3図27・28の帷子峯遺跡および岡上丸山遺跡出土資料がある。いずれも最大径を胴上半部に有する器形（28は算盤玉形をなす）を呈し、2単位の把手と斜方向に立ち上がる注口部が施される。第3図27は胴部にめぐる横位隆帯が曲線的な文様を描き、第3図28は無文となっている。

（阿部友寿・天野賢一）

参考文献

- 石井 寛 1993 『牛ヶ谷遺跡 華藏台南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告14 (財) 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 石井 寛 1995 『川和向原遺跡 原出口遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告19 (財) 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター・横浜市教育委員会
- 鈴木徳雄 1982 「南関東東部」『シンポジウム 堀之内式土器資料集』市立市川考古博物館
- 縄文セミナーの会 2002 『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討—記録集一』